
姫の魂此処に眠る。

Meyrin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫の魂此処に眠る。

【Nコード】

N5321E

【作者名】

Meyrin

【あらすじ】

最近怖い夢ばかり見る作者の鬱憤晴らし小説。

一応ファンタジー小説ですがグロい描写も含まれます。
観覧は自己責任でお願いします。

昔々、『月の守り石』というものがありません。

それはとても強力な力を秘めたもの。

石に認められしものだけがその力を使うことができると言われていました。

昔話は語り継がれて来ましたが、時代の流れとともに廃れたものへと変わっていきました。

ある一族を除いては。

「ひ~~~~めっ!!」

歩いてる少女の後ろの方から声が聞こえた。

少女は声のした方を振り返り大きく手を振る。

「ゆい~~~~~!!」

人ごみの中、ゆいは手を振っている少女に駆け寄り近くの教室に引っ張って連れていく。

星華学園学園祭。

県内でも有名な私立中学校の学園祭にはたくさんの人が来ていた。

この学園の生徒、保護者、さらには小学生や他の中学校の生徒まで。

橘 綾姫 - たちばな あやか -

星華学園の3年生。通称、ひめ。

春日 ゆい - かすが ゆい -

ひめと同じ星華学園の3年生。

「はぁー、すっごい人ごみ。暑い。」

ゆいは手でパタパタと首のあたりを扇ぎながら周りを見回す。

夏の昼過ぎ…学園祭でにぎわう校舎は、普段より数倍人口密度が高く、冷房も意味をなしていなかった。

人込みから逃げ、ゆい達が入った教室は天然石を展示・販売してる店だった。

廊下よりは人が少なく、窓があいているせいか多少涼しい。

ひめは廊下の人ごみを見つめ軽くため息をついた。

「ほんとだよ。ここまで混むなんて思ってたなあ…。」

そろそろ、お店交代の時間だし…。」

ひめは教室に備え付けてある時計を見上げながら言った。

「ほんとだ。あたしらが店番かぁ。」

ゆいもひめの視線をたどり時計を見上げる。

ひめ達のクラスは1階で喫茶店を開いていた。

店番を午前と午後に分け、ひめ達の担当は午後だった。

午前中は他の店を見たりして過ごしていた2人だが、さすがに店番をサボるわけにはいかない。

「さぁ〜つてと。そろそろ行きますか。」

窓の近くで風にあたっていたゆいが振り返って言った。

「そーだね。」

ひめも寄りかかっていた壁から背中をはがし制服のスカートを整える。

2人は並んで教室から出て行った。

2人は5階から1階へと下り、喫茶店へと向かった。

喫茶店につくと、午前担当だった女子が2人に駆け寄ってきた。

「あゝ！！やっと来たゝ！！

あと5分で午後始まつちゃうじゃん。急いでね2人とも。レジ担当だからね！！」

「おっけゝ。」

「はいはい。」

2人は駆け寄ってきた女子に適当に返事をし、入り口近くにあるレジへと向かった。

そして、レジにいた午前担当の子と引き継ぎを行う。

大まかな話を終えると既に午後の営業時間は始まっていた。

どんどんやってくるお客さんを見ながら2人は素早く会計を行っていく。

店の人気は上々だった。昼時、ということもあるだろう。

午後の営業が始まってから1、2時間は休む暇もなく、2人はレジの前で立ち続けていた。

「はあゝ。やっと落ち着いてきたね…。」

3時を過ぎ、客足が落ち付いてくると、ゆいは言った。

「そうだね。」

「やっと座れそう。」

そういうとゆいは近くにあった椅子を自分の方に寄せてそれに座る。

背もたれによしかかり、手足を大の字に開いたゆいは「あゝ疲れた…!!」っと言ってそのまま目をつむる。

「あらら。」

そんなゆいの姿を見ていたひめは軽いため息をついて店全体を見回す。

ちょうどコーヒーを飲み終わって席を立ったお客さんがいた。

ひめはそのお客さんの会計を済ませ、自分も椅子を持ってきてゆいの隣に座る。

2人はしばらくそのままくつろいでいた。

それから10分ほどで、店に残っていたお客さんも全員会計をすませ、出て行った。

喫茶店午後担当のクラスのメンバーだけになった店では、みんな疲れ果てて椅子に座っていた。

「どうしようか？」

しばらくすると午後担当の責任者、学級委員の女子が話を切り出した。

「もう、今日の分の材料も少ないし、お客さんも来そうにないから……片付け始めちゃう？」

明日だって、続きがあるし……今日はこれくらいまででいいよね。」

その提案に賛成する答えがバラバラと上がる。

ひめとゆいもその提案に賛成し、片付けをすることにした。

片付けと言っても、軽く店内の掃除をするくらいだ。

学園祭2日目に向け、椅子やテーブルはそのままにしておく。

各自箒や布巾を持って、床を掃いたり、テーブルの上を拭いたりし

ていた。

ひめが丸いテーブルを拭いていると、床に落ちているきれいなヘアピンが目に入った。

淡いピンク色の花がついている。

ひめは誰かの落とし物だろうと思い、拾おうと腰をかがめる。

その時、金属をこすり合わせたような甲高い音が校内に響き渡った。

音の正体を知ろうと、ひめはとっさに立ちあがり、周りを見回した。

店の中に特に変わったところはない…。

聞き間違いだったのだろうか…いや、そんなはずは……

1人、キョロキョロしているひめを不思議に思い、ゆいは声をかけた。

「どうしたの？ひめ…？」

「どうって…変な音…したから…。」

不安そうな顔をしているひめを見て、ゆいは言う。

「音なんて何もなかったよ？」

「え…？ほんとに？」

「うん。空耳でしょ。」

そう言ってゆいは再び箒で床を掃き始める。

「ふうん…空耳か…。」

ひめはそう呟き、布巾をたたみ直す。

そして、次のテーブルを拭こうと移動したとき、再びあの音が聞こえた。

甲高くて、脳内に響く音…

あまりの大きさにひめはとっさに耳を押さえてしまった。

そして周りを見渡すが、ひめ以外にこの音を聞いた者はいないらしい。

みんな、何事もなかったように片付けを続けている。

「おい！！あれ見ろよ。」

ひめが音に気を取られていた時、ある変化が廊下で起きていた。

それに気づいた男子が声を上げる。

その男子の声で数人が顔をあげた。

ひめも男子が指をさした方をみる。

ひめとクラスの皆の目に入ったのは『赤い霧』だった。

ワインのような赤い色をした霧は廊下を満たし、薄気味悪く漂っている。

どうやら、扉を閉めて片付けを行っていたため、店の中には霧が入ってこなかったらしい。

「ひめ…」

隣からゆいが声をかけていた。

「あれ…何だろうね？どっかのクラスの演出かな？」

ゆいが興味津々な声で聞く。

「でもそれにしても、多すぎない？あんなに沢山…前も見えないよ？」

「だよねえ…。」

ひめの意見にゆいは少しがっかりしたように呟く。

ひめ達の他にも、皆突如現れた『赤い霧』に対して意見を交わしている。

その多くがゆいと同じく興味津々…と言った感じだ。

「ちょっと見てきてもいいよね。」

そう言ったのは学級委員の女子だった。

その子は扉をあけ、廊下へ出ていく。

それに続いて、どんどん廊下に出ていくクラスメイト達。

ひめはそれを止めようとするが恐怖で声が出ない。

気づけば店の中には、ひめとゆいの2人だけが残っていた。

「ねえねえ、あたしらも行ってみない？」

ゆいの言葉にひめは顔を真っ青にした。

「ちょっと…!! ひめ?! 大丈夫?!」

ゆいの言葉にひめは答えることができず、首を横に振る。

「ここ座って。」

ゆいはそう言ってひめの方に椅子を押したがひめは動かなかった。

動けなかった…。

ひめには聞こえていた。

『赤い霧』の中から聞こえてくる甲高い音が。

そして見えていた。

霧の中にうごめく影と霧の中に入って行ったクラスメイト達の末路が。

霧の中にいる何かが発する甲高い音は次第に大きくなっていった。

3階第2音楽室…。

階段を上がってすぐ左手にある音楽室に中野 智・なかの さとし
- はいた。

学園祭の最中は荷物置き場と化している第2音楽室で、中野は休憩
がてらフィルムを交換していた。

中野は星華学園の技術科教師だ。

この学園に来て2年目、そして教師2年目でもある。

少し長めに伸ばした茶髪を後ろでゴムでまとめているせいか、その
整った顔立ちからか、

生徒からは下の名前ではばれるほど慕われていた。

学園祭など大きな行事がある時は、カメラマンとして生徒の写真を
撮ったりもしている。

中野はフィルムを入れ替えると、ネクタイを直し、第2音楽室の外
に出た。

その瞬間、中野は自分の目を疑った。

廊下いっぱいに広がる『赤い霧』…。

1m先でさえ見ることができない。

中野は前日に行われた職員会議の内容を思い出しながら思う。

こんな内容の出し物はなかったはずだ…。

だとしたら生徒の悪戯か。それにしても度が過ぎている。

彼はポケットからハンカチを取り出し、口と鼻にあてた。

吸い込んでまずいようなものは入っていないはずだが、念のためだ。

中野は首にかけたカメラを手に取り、霧の中でシャッターを切る。

そして片手を前に突き出し、足場を探る様にゆつくりと進んだ。

何m進んだろうか。

中野の感が正しければここは3年生の教室　今は作品が展示してあるはずだ　の前あたりだ。

中野は壁を探そうと手を左右に動かす。

しばらくして、左側に動かした手が、硬く冷たいものにあたった。

中野は壁の感触を手で確かめ、それをつたって数歩歩いた。

予想通り、ここは3年生の教室の前のようだ。

壁と壁の間に開けたままになっている扉がある。

その扉の上には3年2組と書いてあるプレートが付いていた。

だとしたらトイレの向かい側の教室だ。

中野は自分の位置を再確認し、3年2組の教室の中をのぞいた。

『赤い霧』で覆われた教室の中は、やはり見通しが悪く、これと言つて何も見えない…。

開いていた扉の近くにあった受付の机が見えるくらいだ。

中野は再びカメラを手にし、自分が見た光景を次々と記録していく。

ふと扉の近く…受付の机を見た時だった…。

机の上から何かがポタポタと床に垂れている。

中野はそれに興味を持ち、写真におさめようと近づく…。

数歩進んだところで彼は足を止めた。

顔の筋肉がこわばるのが自分でも感じる。

彼が見たのは首から上を無くした生徒の姿とそこから垂れる血だった。

ひめはその場に立ち尽くしたまま、今クラスメイト達が出て行った扉を見つめていた。

体を動かそうとしても、神経が切り離されてしまったかのように、指1本動かない。

そんなひめの姿を見て心配したゆいは、状況を理解しようと必死だった。

「ひめ?! 大丈夫?!」

必死に呼びかけるゆいの声もひめには届いていない。

… 止めることができなかった。

これから起こることを1人知りながらも、止めることができなかった。

ひめは後悔と罪悪感にすべてを飲みこまれそうになっていた。

霧の中に見えたあの影。

甲高い音はアレの鳴き声だったのだろうか…。

長い沈黙。

ゆいはひめを見つめ、ひめは自分の思いの中、考えを巡らせている。

2人の間の沈黙を切り裂いたのは廊下から響いてきた女子の悲鳴だった。

「今の何っ?！」

ゆいはひめに尋ねるが、ひめが答える様子はない。

ひめは何かに操られるように廊下の方へ足を動かしていた。

「ひめ……………?」

ひめの行動に不信感を抱いたゆいはひめの腕をつかんだ。

「やめて。来ないで。わたしに……………触らないで。」

ひめが発したのは拒絶の言葉だった。

「ひめ…？」

今廊下に出たら危ないって！！さっきの悲鳴聞いたでしょ？何があったのかも分からないのに！！」

「わたしには…わかる…。…行かないや。」

ひめはそう言い放つとゆいの腕を払いのけ、1人廊下へと走って出て行った。

とり残されたゆいはその場に呆然と立っていた。

追いかけるにも恐怖で足が動かず、ただ上の階に上って行くように遠ざかるひめの足音を聞いていた。

気づけば校舎内は不思議なほどに静かになっていた。

やっと我が元へ帰ってきた思考回路を離すまいと、ゆいは近くにあった椅子に腰をかける。

冷静に考えなくてはならない…。

1人残された今、自分はどうするべきか。

さつき聞こえた悲鳴は確かにクラスメイトのものだった。

彼女の身に何があったのだろうか…。

それに、あの時のひめの表情。

ひめは何か分かっているみたいだった。

実際ひめは何かを求めて上の階へ行ってしまったのだから。

分からないことだらけだ。

でも、霧の中から聞こえた悲鳴…。

霧の中が危険だということは確かだ。

だとしたら…

「ひめ……………」

考えるより先に足が動いていた。

勢いよく椅子から立ち上がり、店の扉に向かって歩き出す。

だんだんと歩調は速くなり、扉にたどりつく頃には走っていた。

そして、扉を勢いよくあけ、『赤い霧』の中へとゆいは入って行った。

ひめの安否をだけを気にして。

勢いよく廊下に飛び出したゆいは霧に圧倒された。

そして、今まで感じたことのないような恐怖が急に襲いかかってきた。

『赤い霧』はさつきより濃く、深くなっている。

不気味な『赤い霧』は全てを飲みこもうと待ち構えているようだ。

ゆいは自分の位置を確認しながら、壁伝いに廊下を進んでいく。

ひめが店から出て行って…足音が聞こえたのは確か中央階段がある方向からだったはずだ。

店から中央階段までの距離は約15m。

1歩1歩確かめながら慎重に進む。

何分経っただろうか。

張りつめた緊張感の中、ゆいはやっと中央階段にたどりついた。

ゆっくり進んでいたためか、全神経が針のように尖ってたためか、時間の感覚が無いように感じられた。

「ふう……」

ゆいは小さくため息をつき、これから上る階段を見つめた。

だが視界はせまく、最初の1、2段しか見ることはできない。

ゆいは手すりに手を掛け、慎重に1歩を踏み出す。

まずは1段……

そして、2段……3段……と順調に足を進めていく。

本当はひめのことが心配で仕方がなかったが、ここで大きな物音をたてて階段を走って上がるほどゆいは

愚かではない。

ゆいも霧の中に入った瞬間から感じていたのだ。

ここには、何かがいると。

そして、ひめはその何かの存在に気づいていたであろう事を。

ゆいは頭の中に浮かび上がってくる疑問を無理やり静め、今直面している出来事に意識を集中させた。

ゆいは再び階段を上がっていく。

半分くらいまでたどり着いた時だった。

足元に集中していたゆいは前方から近づいてくるものの気配に気づかなかった。

手すりを握る手に力を込め、階段をまた1段上がろうと足を動かした瞬間。

ゆいは何かにぶつかるのを感じた。

霧の中から現れた何かはぶつかったゆいを捕らえようとゆいの腕を強く掴もうとする。

「キヤアアアアアア

!!!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!!!!!!!!!

ゆいは突然のことにパニックを起こし、無意識のうちに悲鳴を上げていた。

そして捕まった手を離そうと、もがく。

もう1方の自由な手を手すりから離し、相手の腹部に強烈な1撃を叩き込む。

「ぐっ……」

ゆいの1撃を受けた何かはその場に倒れこんだ。

ゆいは肩で息をしながら今起こったことを頭の中で整理する。

ゆいの前に倒れこんだ何かは腹部を抱え込み、苦痛に呻いている。

ゆいは自分を襲ってきたものの正体を確認しようとその場に片膝をついた。

襲ってきた何かの全体が見えると、ゆいは1瞬言葉を失った。

「……」

停止した思考回路を元に戻そうと、ゆいは襲ってきた何かに向かって話しかけた。

「……中野先生？何でここに……」

中野は腹部に手を当て、痛さに呻きながら呟く。

「おまえ……」

ゆいは自分のおかれている状況を認識し、中野を介抱しようと固まっていた体を動かした。

「あの…先生…すいませんでした……。」

申し訳なさそうにボソボソと謝罪の言葉を呟いたゆいに向かって中野は体を起こしながら話しかける。

「いいパンチだったな…。春日…ちょっと手を貸してくれ。」

ゆいは中野を支えながら起き上らせる。

「本当にすいませんでした…。」

「いや…そんなことはもういい…。」

こんな状況だ。何が起こってもおかしくない。」

中野は真剣な顔つきでゆいを見た。

「先生はこの霧について何か知っているんですか？」

ゆいは少し期待を込めてせかすように中野に質問する。

「ああ…。詳しいことは分からないが、今起こっていることなら少し知っている。」

でも話すにはここは危険だ…。

霧のかかってない教室はあるか？」

「1つ…。あたし達がやってた店なら。」

「そうか…じゃあそこに…」

「でも…！」

ひめが……。先生、ひめを探さなくちゃ…」

ひめは少し焦ったように訴える。

「ひめ…？ 橘か。」

橘がどうかしたのか？何かあったのか？クラスの皆はどうした…？
「！」

ゆいのただならない様子を見て中野も顔を曇らせる。

そして少し冷静に考えてから口を開いた。

「どっちにしる事情を話すためには場所を移動しなくてはいけない。」
「

「はい……。」

ゆいも渋々同意し、2人は店に向かって少し急ぎ気味に歩いていっ

た。

そんな2人を見ている何かがいるとは知らずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5321e/>

姫の魂此処に眠る。

2010年10月10日21時30分発行